

史料



江戸時代の道路を往く (三)

|| 路邊から展望せる江戸時代の姿相 ||

渡部 英三郎

— 本號目次 —

二、路邊に漂ふ宗教的雰圍氣

○寺院

○神社

○路邊に見受けた民衆信仰の對象さまざま

○宗教的雰圍氣を漂はす行路の人々

(伊勢參宮の人々)

(六十六部)

(山伏の群)

(比丘尼)

(僧侶・順禮・寒詣等に)

二、路邊に漂ふ宗教的雰圍氣 (「道路を往く人々の群」の續き)

科學の進歩——生活の各分野に於ける科學の支配力の増

大——は必然に宗教の社會的支配力に影響する。江戸時代

に於いて、現代よりも遙かに濃厚な色彩を以つて路邊に漂ひ流れてゐた宗教的零圍氣は、當時の社會と現在の社會との間に於ける宗教の社會的地位の相異を示すものに外ならなう。

現在に比較し遙かに濃厚に當時の社會を彩つてゐた宗教的色彩、またはその零圍氣は道路上及其附近一帶に於いて如何なる現はれを示してゐたであらうか。當時に於ける二大宗教ともいふべき神道・佛道に對する國民の信仰を表徴せる神社・寺院、及びそれ等の混交的、または派生的存在とも見るべき種々の、民衆信仰の對象、それに對する民衆の深き關心等にその顯著な現はれるを見るべきであらう。また同時にそれ等の宗教またはそれに類する存在と何か特殊な關係に置かれてある職業的、または半職業的な人々の群や、信仰を主要な目的として旅せる極めて多數の人々の群などにもその現はれを見られよう。

例によつて、此處でも先づ、江戸時代の日本の社會を比較的とらはれざる自由の立場から觀察せるものと思はれる

(多くの誤謬を)知識的な外國旅行者の記述等主なる資料として、當時路傍一帶の邊りに漂ひ、浮動してゐた宗教的零圍氣を展望しつゝ話を進めるであらう。

◎ 寺 院

其頃(これは元祿頃の例)、寺院の廣莊・華麗な建物が、四邊に在る他の建築物との比較に於いて、極めて目立つ立派なものであつたことは既に屢々引用して來たケンペルの江戸参府記に、

宗教的建物の中にて光彩あるは多數の寺院なり……建築は莊嚴なり、屋根造りは美術的なり、其の他にも幾多の美觀ありて周圍に挺んでたり。都市に於いても村落に於いても最も高き處、又は最も人目を惹き易き所にあり。

と記することなどによつても其有様が窺はれるが、斯如く封建地方政府の本據である諸侯の城廓を除いては恐らくは最も巨大・高莊な建物であり、それでその附近一圓の地方に於ける民衆生活の中心を形成せるが如き寺院の面影を、現在の旅行者が車窓の外に見出す情景と思ひ合せて見る者

はこの二つの時代に於ける宗教の社會的地位の變異を想起しないでは居ないであらう。

今、時代の主流から取り殘された存在の如くに村や町の一角や都會の目立たぬ一隅などに古ぼけた姿をとどめてゐる多くの寺院(特殊な少數のものを除き)は、嘗つては何れも「周圍に挺んでた」高莊な建物として行路往還の旅人達を張目せしめたものであつたのである。現在に於いては、都市の相貌が巨大な建築物の聳立するビルヂング街によつて代表せらることはいふまでもなく、この傾向は急速に地方の小都會にまで波及しつゝある。純然たる農村に於いてさへも、低き程度に於いてとは雖も同じ事態が顯現しつゝあるを見るであらう。即ち、可なり邊鄙な農村に在つても最早や寺院は「周圍に挺んでた」廣大な建物ではなく、寧ろ舊時代の面影を想起せしむる懐古の對照としてその一隅に遺存するかの如き感じを與へつゝあるに過ぎない。村落の中核も村役場の近代式建築物や、それこそ四邊の建物に對して非常な廣大さを有つ小學校の校舍や、次第に其數を加へつゝある何

々農業倉庫等々の如き非宗教的建築物によつて形成せられつゝあるを見るべきであらう。

右の如き單なる一面的な考察のみによつても江戸時代と現代とに於いて宗教が置かれてあつた位置の相異を知り、隨つて同時に、江戸時代を彩つてゐたより濃厚なる宗教的色彩を想見するに充分であらう。

寺院の社會上の位置は、その建物の情態に於いて示唆せられてあるばかりでなく、其の機能も今日の如く限られたものではなく、遙かに大なる重要性を有つものであつたのである。これ等の點に關する立ち入つた記述は本稿が意圖せる目的の上から避けなければならないが、例へば「寺小屋」としての村童教育上の機能や、寺請帳に依る檀下人の身元の保證等は當時の寺院が有つた周知されてゐる重要な機能であつて、その中殊に村人に對する宗派所屬の證明はこの時代に於ける特殊の事情から最も重要な意味を有ち、それは往々にして僧侶等に醜き不正を犯さしめる原因とまでなつてゐる。即ち徳川幕府はその傳統的なキリスト教排

撃の手段として百姓町人をはじめ凡ての人民を佛教の信奉者たらしめる方法を採つたが、それ等のの人々の佛教信者なることの實證は、寺院の證明に俟たなければならなかつたのである。當時の人々が協同して事業を行つた場合の誓約書等に何れも寺請帳により確實なる宗派に屬することを證明し合ふべきことを記してあつたり、雇傭すべき人間は何れもまた寺請帳によつて宗派の確實なるものであるべきことなどを記してあるなどを見れば、この點に關する寺院の證明は極めて重要なる意義を有てるものであつたことが肯かれるであらう。そして代官などが更迭せる場合に、其新任者が引繼ぐ可き重要書類の一つに「宗旨改帳」⁽¹⁾といふものがあり、代官はそれによつて支配管内住民の宗派を詳明に知り得たのであるから、右の證明に關して僧侶に意地悪く、へそを曲げられたらそれ等の人々は恐るべき無實の罪に脅かされる虞がなかつたとは云はれないであらう。

「註」(1)「豊年稅書」

一、宗旨改帳、是は其村に居住之者、百姓に不限、何人に

ても老少不_レ殘載_レ之、何宗且那寺の印判取_レ之たる帳也。醜惡な僧侶があり、現に屢々寺請に關して貧しき人々などを困惑させた形跡は、熊澤蕃山が、

今吉利支丹の寺請に、貧するものは迷惑し貧にあらねど少し目の明きたる者はきのどくに思ひ居れり。其故は貧なる者は出家に金錢をあたへざれば寺請に不_レ立事を迷惑し、目の明きたる者は不義不作法の出家なれども是非なく檀那とする事を氣のどくにおもへり。⁽¹⁾

「註」(1)「大學或問」

と云つてゐるなどに徴して明かである。これ等のことは、既に爛熟期に入れる江戸時代文化の一般的な頹廢的傾向と聯關を有つものであつて、例へば若き僧侶等と大奥女中や町娘等との桃色遊戯の流行など、共に、この時代に於ける寺院内部の腐敗墮落の傾向を示す片鱗に他ならないのである。

莊嚴神秘的な勸業讀經の聲や鐘のひびきの漏れ聞える寺院の内部が多くの場合、熱烈鐵火の如き信仰の道場ではなく、

不正と醜惡とが充滿せる伏魔殿的存在であつたものと見て不當でないことは幕府の循吏田中丘隅が、

僧侶の身は元來樹下石上を栖とし、麻衣一體の境界たるべき事成に、いつしか身に綾羅を着口に珍味を食して段々驕詰め、分に過ぎ、或は顯はれて婦妻を持、又は密に竊淫を樂しみ一切の施物を是が爲に費し用る事にのみ世を送り……。

と痛撃し、また、

僧侶の身かく年々歳々目前の掟を見聞しても更に心におそろしとも思はず、其宗門の恥とせず、人々には口上に後世菩提の事を説き聞せ、地獄の沙汰甲斐々々しくして何ぞ是に反するや。

「註」(1) 及 (2) 「民間省要」

と嘆じてゐることによつても立證せられるであらう。

江戸時代に於ける僧侶の數が俗人との比較に於いて極めて多數であつたことは、享保年間の調査に於いて江戸の人口(俗人)五十二、三萬人に對し出家三萬六千九百十五人に達

(1) し、また寛政年間の調査に於いて、人口(俗人)五十三、四萬人に對し出家二萬六千九百人(註「二萬は三」に達したといふ記述によつて窺はれ、そこに此時代相を彩れる宗教的色彩を見出されるのであるが、同時にまた寺院の有てる豊富な經濟力を見るべきであらう。

「註」(1) 「江戸會志」

(2) 「甲子夜話」

獨り江戸に於いてばかりでなく、當時僧侶は其の他の地方に於いても、總人口との割合に於いて現代などよりも遙かに多かつたものと考へられるが、然しそれ等の多數が決して信仰に燃ゆる佛教の使途ではなく、寧ろ單なる渡世の手段として寺院に寄生虫的存在を續けてゐるものに過ぎなかつたことは、

眞實に佛法によりて出家したる者は萬人に百人あらん。

其の次は身のかたはなるが、士農工商の一人の働きならざる者は是非なく出家したる者は萬人に千人もあらん。其外は渡世の爲に姦謀をなして淫慾肉食に飽きたること

在家に勝れり。同宿、諸化、江湖などして大寺に寄居者
多くは悪人盜賊なりといへり。

と記してある「大學或問」の記述などによつても窺はれる。

「多くは悪人盜賊なりといへり」といふのはどうかと思はれるが、それに類した種類の人々が相當多く寺院の内部に巢喰つてゐたことは容易に信ぜられるであらう。して見れば芝居に出る河内山宗俊型のギヤング的僧形や其の他硬軟種々の悪僧共が居て相當社會に害毒を流したのであらざることも肯かれなければならない。そうした僧侶共から法話を聽かされる善男善女こそ、相當迷惑な話であつて、

近年の談議説法は偏に佛法の理に不_レ構只商事に似て兎に角利の有事をのみ工夫す。勸化と稱して、袋を出して文庫のふだ色々の云立に錢を集めとる事、初は大方なりしが、次第々々にうるさくのみ見ゆる程也。惜き末世の僧侶、只此商の爲に其家々の學問に疎く、小僧より、でた物此事のみを心として、かな書の談議本、色々の口車の話本など買集め、町々油見世の言立て、役者の口上を

學問の第一と下心に聞習ひ是を修練すると、弘通者説法者杯とよばれて濟ものをと、目あてとするこそ口惜しけれ……。

「註」(1)「民間省要下編卷之四」

といふ記事などによつても、そうしたインテキな内容を有つ説教法話が少くなかつたことが知られるであらう。説法は善男善女が、なるべく惜しげなく財布の口を開けるやうにその内容が組み立てられてあり、僧侶等は小僧の時代からそれを重要な目的として説法の修練を積んだといふし、またその説話の種は、市井のそこへから買集めた假名書きの談議本や、口車の話本などに求められたといふのであるからたまらない。勿論僧侶の凡てがそう云ふ有様であつた譯ではなく、中には名僧知識の稱呼に價する人々も少くなかつたことと思はれるが、然し斯様な種類の僧侶が少らず存在を許され、そしてそれ等の人々から、勿體らしく説かるゝ法話が、善男善女の群を多少でも惹き附けてゐたことは、前に「農村の姿相」を叙した際に言つたことによ

つて一班が窺はれるやうな一般民衆のあの無知・無教養の
状態と照應する事態でなければならぬ。

「附記」 尙寺院生活の裏面に就きては物語るべきとして
多少興味ある資料を有ち合せるが、そうしたことを柄を専
らに記述するのが本稿の目的ではなく、此處では、路邊
に顯著な存在として人目を惹いてゐた寺院の建物と聯關
して、當時の社會に於ける宗教的世相の一端に觸れるだ
けに止め話を次へ進めてゆかなければならぬ。

ケンペエルなども眺めて通つたやうに、當時の旅人等が
宏莊華麗な建築物として、張目瞻仰しながら往還し、また
は敬虔な宗教的情採に陶醉して參詣したであらう寺院・堂
塔は、次に述べるやうな、道路の附近に隨所に見受けられ
た種々雑多な民衆信仰の對象物や、宗教的目的を有つ數多
き、旅人の群など、共にこの時代の道路附近一帯に、色濃
く宗教的な雰圍氣を漂はしてゐたのであるが、然し、そ
うした事態は必ずしも江戸時代に於いて宗教が一般的に健全
な發達を遂げてゐたことを意味するものではないことは以上

述べて來たやうな斷片的な記述のみによつても容易に肯か
れるであらう。

◎神 社

神社も亦、國民の信仰を表徴し、路邊に宗教的色彩を添
へた存在の主要なものゝ一つであつた。その中伊勢大神宮
が國民信仰の搖がぬ基礎的な對象であつたことは後に述べ
る伊勢參宮者の大群が一定の季節に於いて、道路の交通量
を激増せしめてゐたことによつても明かであらう。

神社が如何なる姿に於いて、行路往還の人々の目に映じ
てゐたかは、

聖場を他より高き土地、少くとも公道などの如き不潔な
場所を避けて稍隔りたる所に定め、心を爽かにする弘き
空路ありて信者を街頭より招きよするなり。その入口に
敬虔の表門あり、それは「鳥居」と稱へ、木または石に
て建てたる間濶く丈高く（中略）人若し其の道を辿りて
凡そ數百歩、長き並木の終端に來りて見ればそこには莊
嚴華麗なる建築ありと思ひきや、屢々たゞ粗末なる木造

りの小舎が一重の窓格子を前にして居るが、樹藪に蔽はれてあり……。

「註」(1)「ケンペル江戶參府記」

と述べてゐる外國旅行者の記述等にその面影が窺はれる。これは恐らくはあまり著明でもなき神社に就いて述べてゐるであらうが、森々とした杉並木が立ち、落葉などありて踏み心地よき參道等の面影を彷彿たらしめるものがある。

神社は一般に寺院のやうに大きな社會的勢力の有主であつたとは思はれないが、その神寂びた神々しさが、敬虔な旅行者達の胸を打ち、そこには拍手する旅人等の姿などが多く見受けられたであらう。今日トラツクのほこりを浴びて路邊に遺存してゐる、名も知れぬ小さな社の鳥居の邊りなどにも恐らくは屢々そうした素朴な情景が展開してゐたことであらうと思はれるのである。

然し、神社に祀られてゐる神々が悉く、國民的精神の象徴としての認識の下に崇められたものではなく、當時の民衆の知識と教養に相應する認識のみに於いて尊崇せられた

ものであることはいふまでもないであらう。例へば楠正成を祀れる湊川神社が齒痛の守神として崇められたり、舟人の守護神として拜せられたりしてゐたなどは、そうした現象の存在を力強く立證するものであつて、これに就いてシ―ポルトが、

その近くに楠木正成の墓あり、齒痛の守神なりとてこゝに齒の病人を惹き付く。名將の墓所は蔭深き森林の中にありて花崗石より作りたる紀念碑にて飾り、其の上には神社の形なる小さき家建てあり。前に格子ありてそこに繪馬額を掛けたり。……楠正成は舟人の守護神にてもありと云へば、暴風雨の時、難船のときに誓を立て、神と崇める名將に己が最も惜しむ鬢を獻するなり。

と記してあるなどは、當時に於ける素朴な民衆の信仰の様を想はせて、ほゞ笑ませるものがあるであらう。楠正成が如何なる機縁で虫齒の守神となつたり、舟人の守護神にまで轉化されるに至つたかは知るべき由もないが、そこに江戶時代に於ける宗教的色彩なるものの内容を窺視すべき

一つの資料を見出されるであらう。同時にまた武家支配の社會に在つて往昔の忠臣が置かれてゐて地位などに就きても示唆を與へるものであらう。

獨り此の場合に於いてばかりではなく當時に於ける民衆の低き知識と鈍い批判力とが、根深い迷信など、からみつき、如何はしき社祠の出現を誘致したことは荻生徂徠が「政談」の中に於いて、新寺や新社の出現につき、

誰にても信仰する人有て、修覆建立をされば忽に大社大堂と成とも誰知る人も無、神主氏子を勸進して金を集め。上京して吉田へ願へば、正一位には容易成、住持勸詣開山をすれば何時の間にか宗派高き寺にも成る。奉行も不知。五十年も立てば何方に記録も無、覺たる人も死失る何年の間にか大社大寺と成類甚多し。是皆寺社に定額といふ物無が故なり。(中略)業平天神と云は、業平と云相撲取の墓に、何者やらん小き祠を立てたるが今は在五中將と成たり。小六明神と云は小六と云馬方也。根津權現と云は青陽院様御家中に根津某と云ふ若き者が

刑にあひたるが祟るとて、小さき祠を立てたるが後には女中の取扱にて、今は殊の外に結構に成たり。此類其數を不知……。

と云つてゐるなどによつても窺はれる。それは迷信が生んだ種々の社祠の出現の動機に關し、鋭き解剖のメスを加へたるものであつて流石に碩儒の颯爽たる面影を偲ばせるものがある。また續いて、

某赤城の同心の地を借り住たりしに、屋敷の内に稻荷の祠有り、前々借りたる人の立たる成を、夫とは不知、程無く其地を同心に返す時、右の社を某に何方へも引と云、爰に至りて始て前方借りたる人の立たることを知て毀させたり。某が仕たる家を賣居と云ことにして、別人續と住居せば、件の社は其儘可有、其内に同心の古老も死失せば、此祠は何年より有とも知る人無、後は如何にならんも計難し。此類世上に多かるべし。

と記してゐるなども、充分の根據なくして出現せる社祠に對するこの碩儒の凜乎たる態度を示すものであつて、現在

でも市區改劃等の行はれる場合などに、屋敷内の一隅に祀られてあつた名も知れぬ祠などを取片附ける必要を生じてゐるに係らず、「それに手を觸れては生命を失ふ」といふやうな傳説に脅かれ、その取片附に當る者を恐怖せしめ、それがために社祠がそのまゝ、街路上に残されてあるなどの風景は時をり見受ける事實であるが、それは迷信の支配力の民衆に對する驚く可き根強さを如實に示すと共に、それに困つて寛文享保の昔、既に此人ありしを懐しく想ひ偲ばせるものがあるであらう。

江戸時代の佛教を代表せる僧侶の群が必ずしも信仰の使徒のみではなく、多くの生臭さ坊主型の者を含んでゐたことは、既に述べた所によつて明かであるが、神社の經營に當つてゐた社人神官等もまた必ずしも聖なる敬神の使徒ばかりではなく、中には前に描寫せる如き僧侶等と略其軌を一にするものが尠くなかつた。田中丘隅が「民間省要」の中で、

社人共付居てえもいはれぬ奇しき事共云散して、ひた物

錢をほしがること、其形勢間の山の非人共より劣れり。

且は社毎に色々に繪どりて埒もよき町繪どもを張置て様々不都合成云立とも、偏に堺町所々にして、稀有の見世物杯などよび立てるにひとし。……とかく愚成參道者の錢をむさばるをのみ役とす。扱てもく有まじきふるまひ。何れの神の前にも、かゝる有さま成るや有と興さめて覺へしに、又かゝる事も物とがめまします（月夜見の）神は光の和が成ることよと思ひば却つて責くも思はれたりし。

と云ひ、神官社人等の俗化・墮落に對し火の如き憤激を置めながら、痛烈に皮肉つてゐるによつてもそうした事態が窺はれるであらうした、

其司る人に信有て能く神の威を増し、神に威有て後能貴賤歩みを運ぶ事、聲なくして人の向ふなり。……しかれば神社佛閣の事は先は其神主別當の器量によることなれば人々其職に居て其身を顧りみ、其神佛に益なくして久しく居る事勿れ……。

と警告してゐるなどによつても知られるであらう。

かくて、街道筋近く小高き丘の森の間や、または宿場、村落の端れなどに位置して、寺院の廣莊な堂塔など、共に、

此時代の路邊に色濃き宗教的雰圍氣を漂はせてゐた多くの神社もまた當時に於ける健全な宗教の發達を意味するものでないことが知られよう。

◎路邊に見受ける民衆信仰の對象さまざま

神社寺院の他にも、村の端れ、街道の辻、一里塚の邊りなどには隨所に民衆信仰の偶像が在つた。今では道路の改修等のため主要道路の路傍からは殆ど姿を消してしまひ、たゞ、村人等が山通ひに通行するに過ぎないやうな草深い小徑に僅かに名残を止めてゐる舊街道の道筋などに、行人から全く忘れられた存在として時を遺存してゐるのを見受ける道祖神、馬頭觀音、庚申塚その他さまざまの姿態を成せる石造の佛像や祠などは、何れも嘗つては旅人等の心を惹き、順禮の旅を續けた人々などの敬虔な心情を湧かせた存在であつたのである。それ等のものが江戸時代の街道情

景に一種の色彩を添へ、行路の人々の心を惹いたことは、

一、二回東海道を往還したに過ぎない外國旅行者の旅行記にまで、

馬頭觀音は馬の首せる守護の聖者にして其像といふは兩脚を交叉して蓮華の上に坐し、その頂巔には上を直射する頭髮中より馬の頭挺き出でたり。其の首を馬の頭とは見易からず、眼鏡きケンペルさへ之を牛と見誤りし程なり。⁽¹⁾

と記し可なり詳細な觀察がしてあつたり、または、

日本人はなほ彼等の宗教的物象の中に、石の佛又は……阿彌陀・地藏を崇拜し、その外にも色々の形狀恠奇なる神々ありて、其像は街道の傍に、道の分岐・橋頭・寺院靈場等に建てられたり。これ一つは之を以てそれに崇敬の證とするため、一つは行き過ぎ過ぐる人々に敬神の心を催してそれを以て生活處世につきて善き道、正しき道に思ひ泥ましめんとするものなり。⁽²⁾

と述べてあることなどによつて偲ばれよう。

「註」(1)「シーボルト江戸参府記」

(2)「ケンペル江戸参府記」

これ等の民衆信仰の對象が、果してケンペルが云つてゐるやうに民衆指導の目的に出でたかどうかは更に研究を要するであらうが兎に角そうした存在がこの時代の街道附近一帶を宗教的色調を以つて彩つてゐたことは容易想像に出来る。斯様な、路邊の隨所に見出された信仰の對象にして街道往還の旅人達がどんな態度をとつたかにつきて知るべき資料はケンペルが、

されど旅人は必ずしも偶像の前に拜跪するを要せず、又其の他の方法にて崇敬の表示をなすを要せず、余は旅人が之に對して崇敬の拜禮をなすを見たることなかりきと述べてゐる記述の中に見出される。それによれば當時の旅人等も行く先々のこれ等の偶像に對して一々崇敬の表示をして通り過ぎる程に信仰的であつたのではないが、然し今日の旅行者が、偶々そうした種類の存在を路邊に瞥見せる場合などは、遙かに異つた心情を抱いて通り過ぎたこと

であらうと思はれる。

こうした宗教的雰圍氣の現はれは、道の辻や、橋の附近や、村端れなどに於いてばかりではなく町でも村でも多くの家々の戸口又は柱などにも見受けられた。

尋常の家屋の戸口又は柱には到る所彼此の佛像の、紙半枚に押寫したる粗末の像を見る。身分ある人々は貼付するを好まず……。

「註」(1)ケンペル「同上書」

この種の習慣は今日でも尙山深き地方の農家や所謂「下町氣分」を特徴する都會の家々などにも多少遺存してゐるが、然し元祿の昔に於いてさへも、既に「身分ある人」はそれを好まなかつたといふから、原始宗教的な範疇を出でないそれ等の病魔除け惡魔拂の札等は、その時代に於いても知識の光によつて漸次排除されつゝある傾向に在つたのではあるまいか。それともまた、前に述べたやうないかどはしい僧侶神主などの收入を目的とする札類の賣付などが「身分ある人々」の嫌惡反感でも招いた結果であるか、

何れか明かでない。

それは兎に角として、當時寺院・堂塔など、共に地藏・庚申・道祖神・馬頭觀音其他種々の祠等及それに類した民衆信仰の對象物が續々新たに建造されつゝあつたことは、所々村里に有來寺院堂塔の外に新佛の形像を建立し、或は人々ひたと寮を立て或は席を結んで、後は堂として美麗を盡し、或は辻々に地藏菩薩、庚申の石像を建立して幾らも並べ置、是を信じ是を好む者は多しといへども……。

……禮記に淫祠と云ひけり、物じて人は古きに倦て新きを好む習、其所草創の神社佛閣の廢れるをばさして心とせず、或は山林の片端に新規に庵など造れば、それに且那付て取囃し……又は唐金の佛石佛の類など辻々に所せまく立ならぶなど……。

といふ記述等にも見出される。そうした種類のものが所によつては道の辻やなどに所狭きまでに立て並べられ通行の障碍等を惹起するやうな場合もあつたものと見え田中丘隅

(前文参照) は、それ等の偶像の濫造濫立に對する一般的な非難に於いて、

田舎などは道狭くして、人馬の除合も不自由なる事なるに、何ぞかく佛を以妨とは成やらん。それ道は六道の能化どだに聞、目前にかゝる妨となし、剩へ犬の道しるべに便濁の汚れをなし、耕作の糞し、馬に附人荷ひをしてとも皆穢を佛にかけ臭氣を以神を穢す。かゝる事せずとも佛神は其所古來よりの舊跡を修理して是に心を傾げば尙誠の信心にあらざらんや、何ぞ人間迷へる事酷しき。

と記してゐる。また同時に右の如き、諸種の形體に於ける偶像淫祠の出現の動機に關し、

是等先世話の輩の佛道を誤るより、其外僧俗の男女によらず、不審すくなき正道の事をば不信心、只あやしげなる目に立つことをのみすき好む。

と記せるなどは前に引用せる荻生徂徠の新神社の出現原因に關する解剖など、共に傾聽に價する言葉であつて、そこには既存の宗教が既に頽廢して民衆を支配すべき力を失ひ

それがために民衆が混乱しつゝあつた世相を反映すると共に、一面また何時の時代に於いても斯如き事態が必然に生み出す山師的人物の輩出とその動きを示すものである。それは獨り江戸時代に關してばかりではなく、現代などの世相の考察に關しても示唆と暗示とを與へるものでなければならぬ。

「註」(1)(2)(3)及(4)「民間省要」

この様な情勢は當然に種々の弊害を醸すに至つたものと見え、やがて幕府の注目する所となり、新寺・新社の建立を禁制する共に、庚申塔等の造立まで禁止せられるに至つた。¹⁾

「註」(1)「近世地方經濟資料」

けれども、時代の大勢は一片の禁令を以つて抑止すべくもない、偶像の新立禁止は其効果を充分に收めることが出來ず、殊に監督の充分に行届かない地方の農村などに於いては、禁止後も益々建立せられつゝあつたものゝ如くである。菰生徂徠が

新寺・新社の事も御城下計の禁制の様なり。御城下にて

も町屋敷上屋敷の内に有社は、誰知る人もなし。田舎は地頭も不_レ住居、代官も不_レ居ば、只明放しの様なり。小き社、小き堂を新規に立ても咎る人もなし。…(政談)など云つてゐるのもそれを立證するものあり、その他にも小堂祠や庚申塔などが、續いて建立せられたらしい様子を傳へる文獻が尠くない。

今、一里塚址や、舊街道の小藪の蔭や、道辻の崖際などに、苔がむし、風雨に磨滅して辛じて讀み辿り得る文字の刻みを遺してゐる石造の道祖神・庚申塔や、また村端れの耕地の一隅などに、何ものを祀つたものとも知れぬ小祠などの、古事ありげな老松の下などに時をり見出されるのは、何れも右に述べたやうな時代の産物であつたのである。

◎宗教的雰圍氣を漂はす行路の人々

前にも引用したやうに、外國の旅行者が「北國の大街道は日毎に信ぜられぬ程多數の人々にて埋められ、或る季節には歐羅巴の住人豊富なる都市よりも多い」と稱誇張的ではあるが記述してゐる程、それ程多く街道を往還來し

てゐた旅人群の中には、大名の參觀交代行列や、商人群の外に宗教的目的を有す、または、そうした假面の下に生活の糧を稼ぐ人々の群が多くあつた。そしてそれ等の人々の群は右に述べた神社・寺院・堂塔、その他の民衆信仰の對象と共に江戸時代の道路一帯に濃厚な宗教的雰圍氣を漂はせる原因であつたのである。次にそれ等の旅人群の姿相を述べよう。

伊勢參宮の人々

これ等の旅行者群の中、季節的にはあるが最も、大きな群を成し、行人の耳目を惹いたのは諸國の隅々から伊勢路に嚮ふ伊勢參宮の人々であつた。ケンペエルが「江戸參府記」に、

伊勢參宮を企てる人々は日本國中、何れの國より來るとも、この大街道〔註「東海道」〕のある部分にかゝらぬはなし。伊勢の詣は一年中あれ共殊に春季に多くして、其の頃の道はかゝる旅人もて慎みたり。

と記し、また、

街道に載する人々の數多ければ時として大なる村邑の旅宿と住家にも盡くは入るを得ず。其のために、貧困なる者は野に伏し風雨にさらされ……。

と記してゐるなどは、大群を成して道路を往來せる伊勢參宮者の面影をよく映せるものであらう。殊に伊勢近くなつては諸國から集つて來た參宮者の群が一つの街道に合流するのであるからその混雜は驚くべきものであつたらしく、伊勢街道に往く者、實に一日少きも二、三萬を下らず、多きは五、六萬に及ぶ。

と記せる「元祿世相志」の記述などは、そうした信仰者の群が街道に充満してゐた有様を偲ばせるものであらう。

〔註〕(1)「ケンペエル江戸參府記」の註記より引用。

然し、それ等の信仰的旅行者の群は主として、春、大地が温りて若草が萌えなす頃から夏のはじめ頃に限られ秋風が吹いて道草のすがれが目立つ頃には、街道もメツキリ寂しくなつたものゝ如くである。「民間省要」が道中雲助の生活について述べてゐる左の記述などはよく其の消息を傳へ

てゐる。

夫れ往還のかせぎといふ物、夏冬常に澤山に有て、日々
の渡世ともならば世上に雲助と言名は有まじ、秋より末
は往還もかれへに……。

「註」(1)「民間省要」中編卷四

(六十六部)

最近は殆ど見受けられないが、明治年代の末葉頃までは
時をり田舎路などに姿を見せてゐた「六十六部」または「六
部」は江戸時代に在つては、相當多く街道を往還してゐた
ものらしく、あの怪異な服装や陰氣に打ち鳴らす鉦の音な
どは、一種の厭世的な宗教的色彩を路邊に添へてゐたであ
らう。それに就いても種々の記述が見出されるが、茲には
「民間省要」の記事を引用して其面影を偲ぶ資料とするに止
めやう。

近年諸國より六十六部といふものはやり出、野も山も是
を勤る多し。是等の類は色々の愁に逢ふて、世を恨みた
るもの、又は渡世不_レ叶を捨つるに所よく、行倒る次第

に志して無二無三に出るに有、誠の志ありて縁を捨て、
妻子を離れて出るは稀なり。

右の記述によつて、六十六部は多くは世を恨み、世を厭
ふ者の遁世の姿であり、また時には、生活に窮せる者の捨
鉢的な行旅の姿でもあつたことが知られるであらう。そう
した種類の遁世者が多數に其存在を許容せられてゐた所に
當時の社會が有つた宗教的色彩を見るべく、假りに今日、
斯種の人々が各戸の門を訪れるとも、民衆より彼等の生き
てゆくに足る喜捨は得られないであらう。

こうした方法によつて遁世者や生活窮迫者の群が生活を
續けてゆくのをみると、勤勞を嫌ふ無頼の徒なども六十六
部渡世に生活の手段を見出す者などが多くなつたと見え、
且又近年それにて人又似物多く有つて、願人程の聲おか
しきが四、五、六、七人宛、打揃ふて風流成る筈、うち者、
見事成笈負て、松蟲の鉦を打、謠のシテ、ワキの如く、
一様に面白くかけ、念佛をして大路を一つばいにおし通
る、人錢をやること雨の如し。

と云つたやうな道化けた風景を路邊の其處此處に展開するに至つたのである。然し、どうせ無頼の徒の仕業であるから、衆人の前に於ける恐らくは眞面目くさつた、そして敬虔さへ装つたであらう彼等の風貌は夜に入り宿に着くと共に見事に一變し、

かくて人をたぶらかし、夜はばくちをうち、酒色にふけり、人目を見ては盜して居る類多し。

といふやうな徹底した有様に變つた。斯種の似せ六十六部の方が服装などにも念を入れてよく整ひそうした服装の相異は眞正の六十六部との識別の一標準とさへなつた様子は正身の六十六部は爰も廉相に、身形も悪戯、一人立てであるく事なり。

といふ記述によつても窺はれるが、それは何れにしても、偽六十六部が街道筋に流してゐた毒毒は可なり甚しかつたものと見え、「民間省要」の著者は、

誠の六部はすくなく、段々似せ物多く成る事は何ぞや、命令有つて可ならんや。

と記し其取締を要求してゐるものゝ如くである。

(山伏の群)

芝居に出て來る武藏坊辨慶の姿によつて代表せられるやうな、あの異様な山伏の群は、主として街道筋の名高い神社の附近などに蝟集してゐたが、其處を根城として田舎の果までも歩き廻つて民家を強迫したり食物や金錢を強請したりする者も尠くなかつた。この浮浪者の群は外國旅行者などにも嫌惡を催させたらしく、ケンペルは其面影を旅行記に次の如くに描寫してゐる。

其滞在し住居する所は郷土の名高き神社の近邊に在り。その近邊にて旅人の憐を乞ふとき開山の通力と神聖につき傲慢なる顔にて短く演説し、(中略)彼等は彼等の子供と同じ宗團の服装を着けて頭を削りたるを引き連れ、それをして共に物を乞はしむるに、其厚顔にして剛情なる旅人の甚しき煩となるより。彼の子供等は概して旅人を山路にかゝり急ぎ行くこと叶はず、避け免れ易からぬ所にて待ち受け、何かを與ふるにあらずんば容易に之を免

かるゝこと能はざるより。

古典的な宗服に身を固めたこれ等の社會的寄生蟲が恐らくはその生活の窮迫等を主要なる原因として、次第に暴力團的、非社會的存在と化しつゝあつた様子は右の引用文に於いても其の一斑が窺はれるが「民間省要」中編卷之四が夫れ山伏と言者は、役の行者の流れを汲んで、山に獄に修行し、難行苦行を衣とし、にんにく慈悲を心とするなるに、近年の盜賊、良もすれば山伏の捕はれ來て御仕置と成事は何ぞや……末に至りてかく盜人目あかしの類にひとしく成るこそ惜しけれ。

と記してゐることなどによつて一層明かである。彼等が農村などに入り込んでの暴力團振りなどはなか／＼物凄かつたらしく、

頭巾、すゞかけ、ほらの貝、紋白のけさ、衣裳つきづきしく、八角の棒、その木笠着て歩く杯は一入すさまじき物なり。夫在家に出ては、先貝を吹立て婦女子の氣をうばひ、大成る造り面體して、物を貰ひながら恩ぶり少し

呉ればはけ出してとらず、悪口雜言のるひ言して返答を待ち一言も言事あればはやそれに取付て、能き言質をとりにねだり懸る。

といふ有様であつた。随つて警察力の備らぬ農村地方の人々などがそれを恐れること甚しく、そして、

又言觸は御正體を逆に立る杯、其家へ七代たゝり其の人を殺すなど色々俗説におし迷はされておそるゝ事只鬼神の如くなれば、(中略)よつてわれ／＼も「註」自分達もの意味、喰事不_レ能米杯とられ、錢は云に不_レ及……。

といふやうに強奪を恣にされたのである。その亂暴振りは六十六部などに比較して極めて露骨であつて前者のヨソ盜的・野師の行動とは對蹠をなす純然たる暴力團的行動に終始したらしい。山伏の害毒が餘程甚しかつたことは田中丘隅が、

その汚れたるをかへり見ず民間に大面して高ぶるあり、想じて此類の輩の種類、國の食を費し、民間を誣ひ陥ます事、中に雲助宿なし杯小き類と似るべからずして事を

作することは大也。

と云つてゐることによつても知られる。随つてそれが出家・社人・道人者・非人など、共に幕府及び諸藩の要監視人として、

出家・社人・山伏・行人・道心者、其の外非人體の者迄常に吟味いたし、怪しき者村内に不可_レ差置_一事（地方

凡例録）

といふが如き取締令の下に取締られるに至つたのも當然のことであつたのである。

全國に於ける山伏の数が非常に多數に上つてゐたであらうことは、享保八年の人口調査に於いて江戸市内のみにて六千七十五人、寛政三年の調査に於いて同じく三千八十一人、天明年間に於いて七千二百三十人に達してゐた事實によつても推察せられるであらう。ケンペル等の外國旅行者が行く先々で神社近くの路邊に見た多くの山伏群は何れも江戸以外に於いてはあり、また「地方凡例録」が収録せる山伏の類取締令（前掲参照）は主として地方の農村を主眼とせ

るものである點等から考へ都鄙に亘り全國の至る所に蟄集横行せる山伏の總數は非常な數に達してゐたに相違ない。

「註」(1)「享保八年卯五月改江戸町人計人別」(江戸會志)

(2)「寛政三年五月御勘定奉行江都人數札明」(甲子夜話)

この調査に於ける山伏三千八十一人に就き同書は「今按過少恐非善」と註してゐることを見るべきであらう

(3)「天明中江戸町數人數」(蜘蛛の糸卷)

(比丘尼)

また、これも一種の宗教的な色調を帯びた女の群であつて、盛り場附近の街路の邊りなどに群衆してゐたが、當時の人々には比丘尼の名でそれ等の女群を稱んでゐた。

それは外國の旅行者等の可なり念入りな觀察の對照ともなつたものと見え、例のケンペルは主として伊勢熊野地方に於ける比丘尼に就いて次の如く記述してゐる。

此剃髮せる物乞の中には若き婦人の特別なる宗教的一團あり。比丘尼即ち尼と云ひ鎌倉京都の尼寺の支配下に立つが故に鎌倉、京都の方と、伊勢熊野等へ年々乞食としての所得の中より年金を納めねばならず、その多數は熊

野地方またはその近傍に留まり居る故それを熊野の比丘尼と稱して他の比丘尼と區別す。

彼等は殆ど日本の旅路中至る所にて見たる容貌最も美はしき婦人なり。彼等は兩三人一組となりて毎日我家より二、三里立ち立で、乗物駕籠にて來り、または乗馬して過ぐる貴人待ち受け、何者か來ると見れば三人が一人々々となり、田舎歌を謡ひ頗る慈悲深き人と見れば、數時間もつき行きて之を喜ばし樂しますなり。

また續いて彼等の風姿、所作、態度に就き、彼等は出家と見えす、貧者とも見えす、その階級の制規に準じて剃りたる頭に黒き絹の頭巾を載き、世の人の衣服をしとやかに立派に着飾り、端正にして肅洒たり。手に指筒なき手甲袋を穿き、顔には粉黛を施して廣き夏帽(笠)にて日光と外氣とを避け……その言葉その態度は破廉恥ならず、又憂に沈まず、鄙しからず、又矯め衒はず、自在にして面稍々恥るが如し。

と記してその卑しからぬ外貌を描寫してゐる。けれ共彼女

等が各々その所屬の寺院に對して一定の獻金等の義務をも負はされる一つの制度の下に置かれ、且つ行き交ふ行旅往還の人々の喜捨または惠みを收入として生きてゆかねばならぬ人々であつたことは、やがて彼女等に接客婦的な媚態を帯びしめる結果を生じ、その少からぬ者は、他人の惠みまたは好意にのみによりて生活する若い女が自然に陥る共通の途を辿つたものの如く、「東海道名所記」は、

比丘尼いつの間にか、熊野伊勢には參れ共行をせず、戒を破り、歌を肝要とす。緑の眉細く、薄化粧、齒は雪より白く、手足に臙脂を出し……裾はたれて長く、黒き帽子にて頭をあちに裏見れば、其行状はお嵐により、只管傾城・白拍手になりたり。つきうけの切賣をいたし侍ることの悲しさよ。

と云つて、比丘尼の墮落を傳へ、またケンペルも同じやうに、

されど彼等を賞めちぎるは誤れり。その國の風儀、其の輩の習慣に背きて、其廉恥に重きを置かず、彼等の胸襟

をば公の道途に於いて氣前よき旅客に任すが故に、余は彼女等が頭は僧の如く剃りたりとて輕浮にして醜行ある賣婦の數より取除けやうとし得ぬなり。

と記して、この宗教的色臭を帯びた特殊の女群の間に賣春の風習が行はれてゐたことを物語つてゐる。恐らくは金ばなれのよい旅の商人などの淫らな心などが、次第に彼女等をそうした途へ誘ふ原因の一つとなつたことであらう。

また比丘尼の中には、當時のギャングともいふべき山伏などゝ夫婦となり、二人連れで地方の農家などを強請して廻るといふやうな惡の途を辿るものなどもあつたらしく、「民間省要」の著者はそれに就いて、

且つ又山伏の妻と成る比丘尼と言も是釋門の號なり。其業の汚したるを誰か草を下さん、嗚呼悲哉。

と大袈裟に歎じたり。または、

比丘尼を以て妻とし（註「山伏のこと」釜はらひを婦とす、抑是は何方ぞやいはじ。人外の沙汰明けし。或は夫婦づれ夏秋麥と糠とを賣とし、田舎へ出て修行と號して貰ひ

歩く。不斷に所々を廻るも多し。

と記述してゐたりする。然し道途の邊りに徘徊してゐたこの僧形せる婦人群の墮落が決して其の原因を彼女等自身の道德的缺陷のみに歸すべきでないことは、今日の接客婦人群の墮落が現代の社會機構・經濟組織、及びそれを基調とせる社會的諸現象と密接な關係を有ち、決して彼女等のみに其責を歸すべきでないのと同様である。かうした淺間しい比丘尼の墮落は要するに前に述べて來た、僧侶・神官社人・山伏等々の宗教的諸群の墮落と同じ様に、江戸時代に於ける宗教自體の生命の喪失とその墮落腐敗の一片影であるに過ぎない。更につきつめれば時代の文化總體を密接な聯關を有つてあらう。

（僧侶・順禮・奉詣）

かうした種類の旅姿も江戸時代の街道を特色附ける所の一つの色彩を漂はしてゐた。

僧侶の中には、佛教が未だ生命力に燃えさかつてゐた頃の僧侶のやうに、悟りの道を求めつゝ、白雲行水に任せ、超

俗の旅を續けた者もあつたであらう。けれ共、前に述べたやうな佛教界の趨勢から考へ、多くの場合、無知にして愆

深き破戒的僧侶(前文参照)が、盲信的な民衆から喜捨を求める

ための行脚であつたものと見て間違ひないであらう。僧侶の數が非常に多かつたことは、前に引用した「民間省要」

や「大學或門」「江戸會志」や「甲子夜話」等の記述によつ

ても知られるが、江戸府内在住の者のみにも前述せる如く多數であつたといふから、全國について調査したならば

非常に數に達してゐたものと思はれる、そしてそれ等の僧

侶の少からぬ者が、寧ろ大部分が渡世の手段として剃髮して寺院に寄生せるものであり、眞に信仰に因つて佛門に入

れるものは極めて稀であつた(前文参照)といふから、町から

町へ、村から村へ、喜捨を求めて廻り歩く法衣姿の數は可なり多かつたものと見なければならぬ。今日では、極めて稀

れに見かけることがあれば、全く時代離れのした存在として、行人の目を惹く順禮の「おひづる」姿も、江戸時

代には街道の情景に宗教的雰圍氣を漂はす程に頻繁に往來

してゐたのである。ケンペルも東海道の旅行に於いて屢々行き會つたものと見え、

旅人が來た所々に出會する者に所謂「順禮」なるものあり、順禮とは日本全國に散在する名だたる三十三箇所

の靈場に參詣する周國者にして二人三人宛伴ひて徘徊し、家毎に觀音經を憐れに歌ひ……行く人々の袖にすがりて

喜捨を求め、之を煩はすことはあらず。

と旅行記の一節に記してゐる。

寒詣りは勿論季節的な旅行者であつてその異様な、非理

智的な姿もまた、この時代に於ける民衆のナイーヴな信仰を路邊に露出せるの、一つである。その他虚無僧・願人・

行人等何れも宗教的背景を有つ行路者の群であつて、時代の民衆信仰がそれ／＼の形に於いて路邊に浮動する姿に外

ならない。然しそれ等のものに就いては、くどく／＼さを避けて記述を省略するであらう。

要するに、右に述べて來たやうな種々の、そして極めて

多數の宗教的旅行者群の存在は、寺院堂塔・神社、その他の民衆信仰の諸對象と共に、この時代に於ける宗教の民衆に對する支配力の根強さが路邊に示現せられてゐる姿である。今日の社會は斯如き多數の人々が、主として民衆の喜捨によつて、その旅行を續け得る程に宗教的ではないであらう。

斯うした街道情景を、自動車で埋められた舗裝道路が、鐵道や軌道と平行し交叉しつゝ走り、沿道一帶の光景が官衙・學校・工場・倉庫・停車場・銀行・會社等の如き、非宗教的建築物を中心として形成されてをり、そして行人の姿相から宗教的色調を見出すことの極めて困難な現代の道路及沿道の情景と比較して考へれば、そこに一つの完全な對蹠が見出されるであらう。

然し前にも觸れて來たやうに、江戸時代に於いて未だ宗教が有ち續けてゐたこの大なる社會的支配力は、必ずしも當時に於ける宗教の健全さまたは文明史的評價による高き發達を意味するものではない。教育の普及がなく、蒙昧と

迷信とを以つて被蔽されてゐる社會に關する限り、生命力を失つて形體化せるばかりでなく、正視に堪えね墮落の泥土に陥没してゐる宗教さへも、尙民衆に對して相當根強き支配力を有つものであることを示す一例に過ぎない。

然しそれはそれとして若し現代人がありしがまゝの江戸時代の街道を往還したとすればそこには原始宗教の範疇を出でない多神數的雰圍氣が俗化された佛教等の色調に混じて色濃く漂ひ流れてゐるのを見たに相違あるまい。(未完)

「路邊に漂ふ宗教的雰圍氣」の巻終り

